



白石区菊水にある澤田工業の本社で図面を前にする栗田さん（左）と尾崎さん

鉄筋コンクリートの建物で、柱や壁などのコンクリートの構造物を作るために欠かせない職種が、型枠大工です。図面を読み取る解析力、平面の設計図から立体的な三次元の世界に展開する能力などが求められる、クリエイティブな仕事です。

ところが、建設業の中でも有効求人倍率が高く、その仕事の魅力があまり知られていません。そこで、1958年に札幌市で創業した澤田工業(株)で、職長として、さまざまな型枠工事の現場で活躍している栗田宏野利さんと尾崎哲雄さんを訪ねてみました。

技能が求められる型枠大工

型枠大工の仕事を始めて30年以上の経験を持つ栗田さん。後輩の尾崎さんとも長い付き合いです。二人は札幌市内にあった同業の会社に勤めていましたが、社長の逝去に伴って解散となったことを機に、澤田工業に入社しました。当時、すでに型枠工事の現場で職長の任に当たっていた栗田さん。「自分の下で頑張ってくれている後輩もいたので、知り合いに相談したとこ

ろ、面倒見がよく、職人を大事にしてくれる社長がいると聞いて、澤田工業にお世話になることになりました」と言います。尾崎さんも職長として現場を取り仕切っていたため、現場がひと段落したところで、栗田さんから声を掛けられ、入社となりました。

「あまり深く考えずに、この仕事を選んだ」という栗田さん。一方、尾崎さんは鉄骨を建てる鉄骨とびの仕事をしていましたが、手に職をつけるべきだというアドバイスから型枠大工に転職しました。

型枠大工は、鉄筋コンクリートの建物に欠かせない職種です。建物の形の“枠”に固まる前のコンクリートを流し込み、建物の柱や壁を作っていくのですが、そのコンクリートの形を決める枠が「型枠」です。その型枠を作り込んでいくことが、型枠大工の仕事です。

型枠大工の現場への第一歩は、“拾い出し”です。これは図面からさまざまな情報を読み取り、どんな型枠を作るのかを加工図に拾い出す作業です。型枠づくりはもちろんですが、現場で型枠を組み立てる位置を確認してマーキングする“墨出し”と呼ばれる作業を

行い、型枠を建て込み、コンクリートを流し込む打設を経て、コンクリートが固まった後の型枠を解体する作業まで、建築物の骨格づくりを担う、重要な役割を果たします。コンクリートは固まってしまうので、失敗するとやり直しがきかない緊張感のある仕事です。

中でも難しいのが拾い出しで、経験を積んだ職長クラスの技能が求められます。図面を読み取るだけでなく、平面上の二次元の設計図を立体的な三次元の世界に展開する能力、完成後の建物をイメージする想像力、さらにセンスが求められ、図面にある情報をすべて頭に入れた上で、知恵・技能・経験を総動員して向き合う作業です。

しかも、設計や立地や環境など、どの現場も違っているのです。そのつどオーダーメイドで型枠を仕上げていかなければなりません。

任される現場の大きさとともに、責任とやりがい

近年、大手ゼネコンでは優秀な職長を「マイスター」に認定し、手当を支給するなどの取組が進んでいます。取引先からマイスターとして認定されている二人だけに、これまで担当した現場を聞けば誰もがわかる施設が少なくありません。

「地方で長期にかかわった現場、建物の構造が難しかった現場など、どれも思い出があります。例えば、1年半くらい泊まり込んだ北斗市の北海道新幹線函館車両基地新築工事や、札幌市の大谷地にできた教会の札幌神殿。この工事は構造が難しく、止めていたタバコを再開してしまいました…。でも、出来上がってしまうとやり切ったという思いが湧き上がってくるんです」と栗田さんは笑います。

尾崎さんも「札幌三井JPビル赤レンガテラス新築工事は、思い出深いですね。この現場では逆打ち工法を初めて経験しました。会社では実績がありましたが、自分が担当する現場では初めてでした。ゼネコンさんの担当者の方とコミュニケーションを取りながら工事を進めました」と言います。躯体の工事では、基礎の部分を掘削し、そこから上階へコンクリートを打設していく順打ち工法が多く用いられます。しかし、逆打

ち工法は、土砂などが崩れないように床を支える床梁ゆかばりを利用しながら、地下の躯体を上階から下階へ、掘削と躯体の構築を繰り返していく工法で、工期の短縮や周囲の環境に配慮した地下工事が可能になります。

初めての経験は緊張感が伴うものだったのでは、という質問に「それはいつもあります。どんな現場でも」と尾崎さん。いくら経験を積んでも、常に緊張感をもって現場に臨むという言葉に、現場にかける責任感と想いが伝わってきます。

「お互いに、毎年、注目されている大きな現場を任せてもらっていますが、仕事に向き合う気持ちは以前と格段に違います。昔は生活のために仕事をしているようなところもありましたが、今は現場が楽しい。大きな現場は苦勞も多いけれど、達成感があります」と、栗田さんが言う。「全く同じ気持ちです」と尾崎さんもうなづきます。

任される現場の大きさや注目度の高さに伴って、責任感とともに、やりがいが増しているようです。

次の世代へ、技能をつなぐために

1958年の創業以来、半世紀以上にわたって型枠大工工事を専門としてきた澤田工業。その技術力から、藻岩山山頂展望施設新築工事、札幌信金本店ビル新築工事、孝仁会大野病院新築工事、札幌徳州会病院新築工事と、施工実績には二人が名を挙げた以外にも、「あそこか」とわかる施設が名を連ねます。



後輩の指導に当たる栗田さん（右）

一人ではできない大仕事ですから、現場ではチームワークが求められます。栗田さん、尾崎さんは各自のチームを組んで、現場を切り盛りしています。職長は現場全体を管理しながら、部下の指導から他の工事業者との調整、スケジュール管理や安全への配慮など、目配りしなければならないことがたくさんあります。

栗田さんは「とにかく、よく会話をします。昨日は何を食べたのか、休日は何をしたなど、たわいのない話をするので、みんなの様子がわかります。鉄筋工など、他の専門工事の人たちともよく話します。会社や職種は違って、前に現場で顔を合わせた人が多く気心が知れているので、あの現場はどうだったかなど、情報交換もできます」と、積極的なコミュニケーションづくりに尽力しています。栗田さんに比べると寡黙な尾崎さんも、経験を積む中で「顔見知りの人がいる現場が多くなって、スムーズな仕事につながっています」と語ります。

二人がこの仕事を始めたころは、最初は体づくりからと資材を運ぶ作業ばかりで、親方の背中を見て覚えるという時代でした。そんな苦勞を知っている二人だからこそ、新人には型枠づくりや建て込みなど、できるだけ実践を積めるように気を配ります。昔は新人の仕事だった資材運びも、どこを担げば効率的か、一緒に実践しながら覚えてもらうようにしています。

澤田工業では、2020年4月に新たに六人の新人が入社します。入社後は、東区にある資材センターでの実習や本社での座学、静岡県にある富士教育訓練センターでの型枠研修などを経て、それぞれのチームに新人が配属されることとなります。

また、3月からはベトナムの技能実習生を三人受け入れることになっていて、現場で指導役となる二人の役割は、ますます大きくなります。

ベトナムの三人は、栗田さんのチームに加わることになっていますが、「同じ職長でも、僕はお笑い担当だから」と、場を和ませて「何とかかなると思います。

仕事は厳しいけれど、身振り手振りも加えて、少しずつ技術を伝えていきます」と、培ってきたコミュニケーション力を発揮する機会を待っているようです。

コツコツと仕事を見せていくタイプの尾崎さんも「これからの目標は、世代交代ですね」と、次の時代を担う後輩に、技能を伝承していくことを見すえています。

建設業の中でも型枠工事は有効求人倍率が高く、人手不足への対応は、喫緊の課題です。「そんな状況の中で、積極的に新入社員を採用してくれて社長には感謝しています。だからこそ、次の世代に引き継ぐときには、15~20人くらいのチーム編成ができるように若い世代を育てていきたい」と栗田さん。

一方、尾崎さんのチームには、2年前に入社した息子さんがいます。「札幌工業高校を卒業し、親の反対を押し切った入社でした。きっと想像と違って、仕事の難しさを実感していると思います。次につながってくれればいいんですが…」と、親としての願いと職長としての責任という両面の思いが交錯しているようです。

「会社や現場、後輩など、さまざまな立場の人たちのことを思いやり、考えながら現場を取り仕切ってくれる」と二人に厚い信頼を寄せる澤田信彦社長。「新しく入ってきた若い社員を地道に育てていくことに重点を置いています」という思いは二人に受け継がれ、しっかりと実践されています。



型枠のパネル加工を見守る尾崎さん